

平城宮東院地区出土の 井戸枠部材

—第245-1次

はじめに 1993年度におこなった平城宮東院地区南部（宇奈多理神社丘陵南西）の発掘調査（第245-1次調査）において、井戸SE16030を検出した。調査地では、ほかにも南面大垣SA5055を確認している。

SE16030は、一辺約5mの方形掘方の中に、扇形断面をしたヒノキの厚板材20点を太柄でつなぎ、藤蔓を巻いて固定した円形堅板組の井戸である（図239、表34の1～20の番号に対応）。井戸周囲の仕上げ面からは、方形の石敷きと石組溝を検出した。石敷きと石組溝は後に整地土で埋められるが、その後もSE16030の上に河原石を2段積んで石組とし、さらに継続して使用した（『1993 平城概報』）。井戸掘方からは、Ⅱ期の軒平瓦が出土しており、平城遷都以後に掘削されたものと考えられる。

SE16030を構成する井戸枠部材は概報段階では未調査であったが、このたび調査をおこなったので報告する。

出土部材 各部材は最大長さ約1,700mm、最大幅約220mm、最大厚約140mm（表34）。いずれも心持材で、心は内面側に寄る。部材上端は腐朽により切損する（図240）。

太柄穴は（図241）、部材側面の下端から約845mmの位置に、長さ約90mm、幅約40mm、深さ約55mmをノミで彫り込む。太柄栓は面取りの仕上げが確認できる（図242）。隣接する部材どうしは太柄栓を太柄穴に差しして連結する。腐朽する部材上端にも仕口の下端と類似の痕跡を確認し（図243）、太柄や雇柄などの仕口が想定できる。

太柄を中心として、側面には、垂直・水平方向に2本ずつの墨線が引かれる。垂直方向の線は下端小口にまわる。墨線は太柄の幅と位置を示しており（図240）、側面から下端小口にまわる線は反対側面の太柄を対称の位置に定めるためのものと考えられる。

外面はチョウナのはつり痕跡が明瞭に残る。刃幅50mm前後で平行に規則正しく加工される。下部には藤蔓を巻いた圧痕が残る。外面両縁辺部はヤリガンナで円滑に（図244）、側面もヤリガンナで平滑に仕上げる（図245）。ヤリガンナの痕跡は不明瞭なものも多いが約15mm幅で削る。下端小口はノミで荒く仕上げる。刃幅は約15mmである。なお太柄から下端小口までの長さは、部材によって20mm前後の差が確認できる。このことから下端小口は地

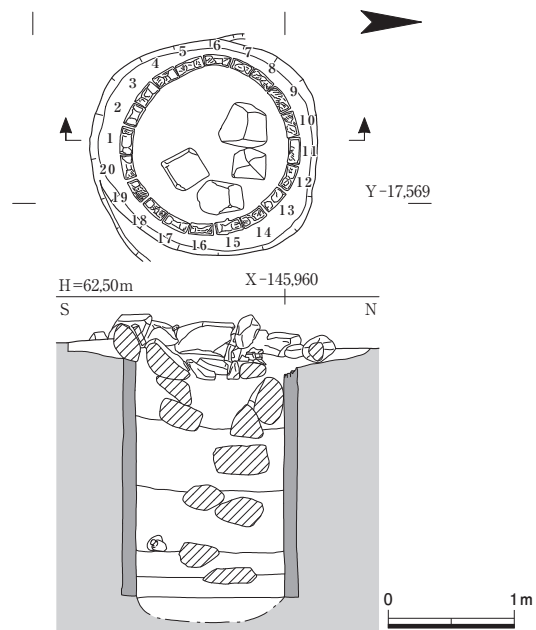


図239 SE16030遺構平面図・断面図 1：60

表34 部材実測寸法一覧表（単位：mm）

	最大長	最大幅	最大厚		最大長	最大幅	最大厚
1	1,709	224	141	11	1,599	216	135
2	1,715	219	150	12	1,671	230	142
3	1,767	224	137	13	1,722	227	136
4	1,711	225	135	14	1,671	215	132
5	1,696	225	128	15	1,748	216	136
6	1,738	217	130	16	1,675	223	138
7	1,634	220	134	17	1,691	224	135
8	1,695	220	145	18	1,708	219	141
9	1,757	221	140	19	1,709	222	149
10	1,752	225	140	20	1,745	212	134

盤との接地にあわせ、微調整で削ったと考えられる。内面は明瞭な仕上げが確認できない。木目が目立つことから割肌の可能性はある。

井戸枠のうち、18点（1・3～17・19・20）の外面や側面の下部には「本」という墨書が確認できる（図246）。検出状況からは部材を据える際の天地を示すとみられる。さらに、「鑿」（7）、「隠」（8）、「隅」「墨」（12）といった落書が確認できる部材も3点ある。なお、これら墨書の内容については、すでに報告している（『平城木簡概報 29』）。

まとめ 今回調査した井戸枠部材20点にはいずれも建築に用いるなど転用の痕跡はみられない。しかし、すべての部材にみられる加工の痕跡は、奈良時代の加工技術をよく表しているといえる。また、部材の複数面にわたり、連続する墨付けは加工の過程を示している。以上のように、これらの井戸枠部材は、当時の加工技術を知るうえで、貴重であるといえよう。（大橋正浩）

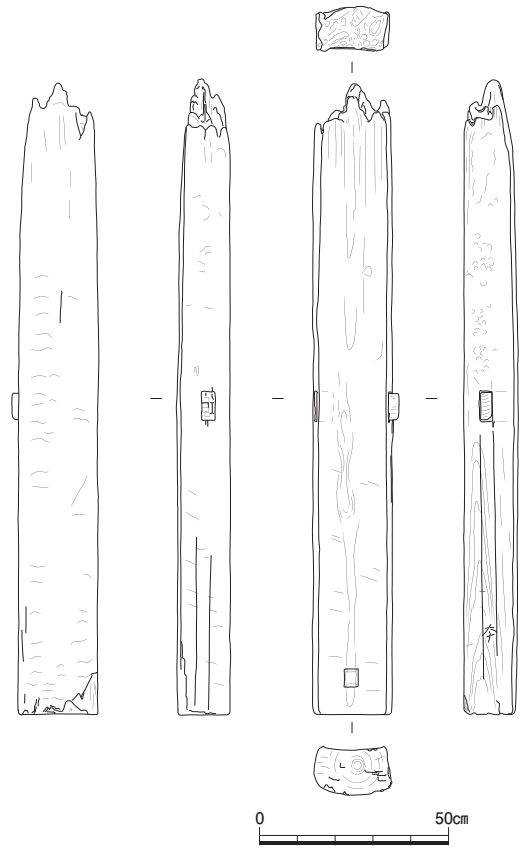


図240 井戸枘部材 (No.14) 1 : 20



図241 太柄穴のノミ痕跡



図242 太柄栓の面取り



図243 部材上端の腐朽と仕口の痕跡



図244 外面のチョウナと縁辺部のヤリガンナ痕跡



図245 側面のヤリガンナ痕跡



図246 墨線と墨書「本」